

六 花



2011 平成23年
俳句雑誌りつか

3月号

Cover designed by Little Bird

さ 猿を追ふ石を手許に楮蒸す

ん 掬びたる雪解の水に草の香す

ぜ ぜんざいや水餅かりつと焼き上げて

ん 無垢材の大俎板に寒の鯉

せ 赤飯の塩を多めに雛祭

か 傾ぎたる氷柱の水車回り初む

い 色褪せし畳に日脚伸びにけり

の 野良猫の冬日に顔をしかめをり
か 軽石の漂ふ鴨の去にし池
ら 洛西や鳥居の小石雪と落つ
す 水仙の蕾を包む薄氷
を 雄の滝の音を曲げたり春疾風
こ 子供らに持ち去られたる薄氷
ろ 轆轤蹴る足袋の爪先抜けしまま

ことり

い 一服の茶に目を細め梅日和
か 貝雛にいていねいに紅さしゐたる
せ 清潔に音を閉ぢ込め春の雪
ん 胸元に染しむる甘酒梅見茶屋
ぜ 禅寺をかこみ紅梅満ちにけり
ん むくむくと春の日差しに休む鳩
さ 咲き満ちて梅ヶ香うすうなりにけり

大寒の満月を浴び身を洗ふ

坂本 鴻

だいかんのまんげつをあびみをあらう さかもとこう

朝日浴び大地の野草春を待つ
舞ひ降りて雪より白き鴻の鳥

たまたま大寒と満月が重なった。身を切るような夜空から煌煌と光りを注ぐ月光は何時もの満月とは大きく違う。その光りを浴びていたら、身も心も浄められるような心地がある。そのとき「身を洗ふ」という言葉が自ずと口をついて出た。当に大寒の満月から句を授かったという方がいいだろう。これは月を仰ぎながら俳句の心が待ち受け状態になっていたからである。坂本さんは殊の外、鴻の鳥を愛し、毎週のように但馬へ通う。その途次であるうか大寒の満月に出会った。その一期一会の満月をただきれいなあ、でやり過ぎるか、しばらく車を止めてじつと満月の光りを浴びているかの違いが出たのである。坂本さんは今月から「鴻」の俳号を使う。

ちぢこまる鯉の上なる氷柱かな 牛尾 文雄

ちぢこまるこいのうえなるつららかな うしおふみお

豆撒きや福に満腹なるわらべ

バレンタイン重ねしチョコを妻が見る

冬場の鯉は縮こまったようにじつと垂れてゐる。その鯉の上には氷柱が落ちて来る。そのうち鯉は向かつて、ましかしたら動かない鯉を直撃してしまふ。そう思はないかと想像してしまふ。そう思うと寒さに耐えている鯉が、いっそう哀れに思えてくるのである。掲句は寒さに縮こまっているように見える鯉の上に氷柱が垂れているとだけしか言っていない。ちぢこまる鯉と観たのは作者の主観であり、鯉の上にある氷柱は写生であるから、主観写生の句となる。掲句を「頭上の氷柱を見て鯉が怖がつて身を縮めてゐる」と解釈してはつまらなくなる。あくまでも冬場の鯉の潜在味を味わえばいいのである。牛尾さん

は夢風撰二度目。

雪 卿 集

県ざかひ

梶浦玲良子

彼岸より此岸へとんで帰り花
干大根小川ひとつを県境
雪吊に星ぎつしりと灯りけり
馬蹄打つ足の裏まで寒茜
抱卵の雉子の臉を日の跨ぐ

西行庵

笹村政子

聴きとれず西行庵の霜しづく
青き芯とどめて芭蕉枯れにけり
布団干す門前町の軒低し
山峡の緩びに湧ける冬の霧
み吉野の葛湯にむせる別れかな

せつじゆしゆう
雪樹集

運動会

志方章子

百万弗の夜景
芯から氷りけり
傷負へる鯯の勢
ひよく過ぐる
西塔のかがやく
中を鳥渡る
青空の落ちて来
てをり運動会
運動会終りて元
氣戻りし子

師走

永田

勇

嘴に水零し
つつ鴨走る
空中に餌を受け
むとゆりかもめ
深まりへ滲みて
ゆける冬の鯉
寒風に袖口握り
向ひ行く
師走かなひねも
す思案してゐたる

螢雪譚 六甲

水盤に黄葉一葉を病む妻へ 松本文一郎

「病む妻へ」というのが切ない。病気で外出できない妻への労りの一枚は、外にある何百枚の黄葉に勝る。黄色の葉と書いても「もみじ」と読む。水盤をのぞき込んで嬉しそうにほほえむ奥方の顔が水鏡に映っている。同時句に「学舎へあの道此の道銀杏降る」とあるから黄葉の一枚は銀杏かもしれぬ。「木洩日の縮目踏みつつ紅葉狩」も良い場面だが、表現に苦勞をしたのだろう。「縮目」が読者を迷わせる。木漏れ日を踏むとだけを言った方がよかった。「躲したるつもりが頭へと木の實際る」も面白かった。人間の身体の構造は前方から飛んでくる物体には身をかわしやすいが頭上から落ちてくる物体はよけるのが難しい。「鳥たちに見過ごされり一位の実」もここで書きたかった作品。一位の実の「一位」なのにという皮肉が根底にある。

雪吊に星ぎつしりと灯りけり

梶浦玲良子

雪吊で有名なのは金沢、兼六園の松。冬場雪の重みで枝折れしないよう、支柱を立て縄で枝を吊つておく。晴れた日には澄んだ夜空にぎつしりと星が出ているのを、まるで雪吊に星が灯っているようだというのである。雪吊りが金沢のものと限定しなくてもよく、それぞれの雪吊りに当てはめて味わえればいい。「干大根小川ひとつを県境」は漬け物用か切り干し大根を作るため大根を干している山里の光景。その側を流れている取るに足らないような小さな流れが県境になっているのだ。一本の（流れ）ではなく、ひとつとしたところに作者のこだわりがあるのだろう。「抱卵の雉子の臉を日の跨ぐ」も瑣末なところに視点を向けている。瑣末的なところにも俳句の醍醐味が隠れている場合もあるのだ。

（以下略）



六花集

梅 一 枝 仰 臥 の 母 に か ざ し け
探 梅 の 下 り と な り た り け
春 禽 の 明 眸 の 捉 へ た る も の 遙 かり
牡 丹 雪 う ち 重 な り て 落 ち に け
冴 返 る う ら に 廻 れ ば 点 り た り
る

藤 生 昇 三

白 壁 に 臘 梅 写 す 日 向 か な
日 に 摘 み し 土 筆 を 夜 に 広 げ け
大 寒 や 目 覚 め て 鳥 に 応 へ た り
も の 食 へ ば 一 人 の つ の る 炬 燵 か
ま ば た き に 光 り 飛 び 散 る 冬 日 か
な

田 尻 勝 子

冬 霧 の 視 界 た ち き る 村 の 朝
い く つ か の 苦 楽 重 ね て 木 の 葉
数 へ 日 や 一 と 日 ひ と 日 が 逃 げ て ゆ
ひ ら ひ ら と 枯 葉 舞 ひ 来 る 杣 の 道
流 れ る て 流 れ な き ごと 冬 の 川

小 寺 ふ く 子